

圧巻の「SOLO」!! 渡辺玲子の凄すぎる世界

渡辺玲子(vn)の無伴奏ヴァイオリン作品集がハイブリッドSACDで登場。



【SOLO～無伴奏ヴァイオリン作品集】
〔イザイ：無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第6番、ヒンデミット：無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第1番、J.S.バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのバルティータオソ第3番、佐藤眞：無伴奏ヴァイオリンのための幻想曲、エルンスト：《魔王》による大奇想曲、同：《夏の名残のバラ》による大変奏曲〕
渡辺玲子(vn)
〔録音：2010年9月、2011年2月〕
〔Fontec®FOCD9552〕
CD&SACD

Kazuhiko Watanabe 渡辺和彦

「無伴奏」のヴァイオリン曲ばかり集めた雑多な選曲に思われがちだが、エルンスト作品を除いて明確なコンセプトがあるので、裏テーマは「バッハ」。

「無伴奏」のヴァイオリン曲ばかり集めた雑多な選曲に思われがちだが、エルンスト作品を除いて明確なコンセプトがあるので、裏テーマは「バッハ」。

発生させるG線、重音時の高音の爽快なまでの正確さ。こういう演奏なら何度も聴きたくなる。

ヒンデミット作品はリッコ・アマール(1890～1950)に献呈。アマールが主宰するクアルテットでヴィオラを担当していたのがヒンデミットだった。第2楽章の冒頭素材などバッハの無伴奏ソナタ第3番ハ長調BWV1005のプレリュードから派生していると思えず、他にも外観は異なるもののバッハの遠雷がきこえる。第4楽章(間奏曲/リート)では、譜面の背後に隠れたメロ

ディーが明確に浮かび上がってくる。他の録音ではほとんどきけない、今回の発見、収穫だった。

合唱曲《大地讃頌》の作曲者として有名な佐藤眞の《幻想曲》(97)は、ヒンデミットやイザイともども2007年9月、渡辺玲子の白寿ホール・リサイタルの際に演奏されている。演奏時間約8分。特殊奏法が次々と出てくる大変な作品で、最後の1分で突然のように調性的になつて終わる。他にも愛奏者がいるのは演奏し甲斐があるからか。

「思わず「凄いい！」と叫んだラスト2曲

J・S・バッハはBWV1006を収録。渡辺玲子は2000、01年、ワーナーにBWV1001、04、05を録音済なので、重複を避けたのだらう。ワーナー盤がそうだったように、これはちよつとユニークなバッハで、私には曲よりもむしろ演奏者の強烈な個性やテンペラメントを聴くためのものに感じられた。快速で整然とした冒頭楽章はその響きも含めて違和感があつたが、気を取り直して聴き進んだ中間の楽章には、随所に「渡辺玲子」の署名が

強く刻印されて興味深い。聴きなれたガヴォットでは、楽器(グァルネリ・デル・ジュス1736年製、ムンツ)がとびきり良質なことが録音からも確認できた。ただ音が常に外に放出される感じなので、内省的な音楽を期待するとはぐらかされる。

このディスク最大の聴き物は、近年特に協奏曲後のアンコールとしてさかんに演奏されるようになったハインリヒ・ウィルヘルム・エルンストの《魔王》による大奇想曲」と、同《夏の名残のバラ》による大変奏曲」だらう。この2作品を、ここにあるような驚くべき正確な音程とリズム、鬼気迫る音で再現できるヴァイオリニストは、日本では彼女だけだらう。内外の少なくない名手が、グシャグシャになりつつ迷走、それでも最後に拍手喝采を受けて舞台袖に引き上げるのを何度か目撃している。《魔王》の後半、原曲では子供が悪魔に殺られて父親が狂気のように馬を走らせる箇所では(楽譜の最終ページ。3分30秒過ぎあたりから)、思わず「凄いい！」と叫んでしまった。